

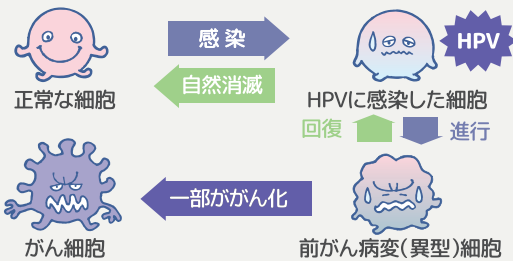
子宮頸がんってどんな病気？

初期に発見できれば子宮が残せる

子宮頸がんは、子宮頸部(入り口)にできるがんで、原因は、おもに性交渉によるHPV(ヒトパピローマウイルス)への感染です。HPVは性交渉の経験のある女性の8割が感染しますが、その多くは免疫力によって自然に排除され、ごく一部ががんになります。

がんは大きくなるにつれて子宮頸部の奥に入り込んでいき、リンパ節などへも転移。さらに進行すると膣や子宮を支える組織、骨盤壁などへと広がっていきます。

子宮頸がん細胞の発生メカニズム



HPV感染後、5~10年で、一部ががんへと進行する

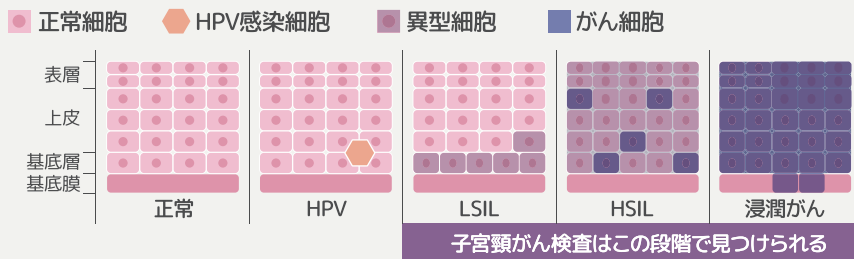
子宮頸がんのおもな症状

初期

まれに性交時の出血がみられる程度で、自覚症状はほとんどない

進行すると

不正出血、悪臭のあるおりもの、下腹部の痛み、排尿障害 など



進行すると子宮全摘手術が必要になるため、将来の妊娠・出産を希望する若い女性も注意が必要。



「異形成」からがんへ進行するのに5~10年

定期的に細胞診+HPV検査を受けていれば、子宮頸がんへ進行する前に発見することができます。浸潤がんに至っていない状態なら、子宮を残せる可能性が高まり、妊娠・出産も可能になります。

子宮体がんとの違いは？

子宮がんは、子宮頸がんとうつ体がんへ分類されます。HPVによって子宮頸部に発生し、ゆっくり進行する子宮頸がんに対し、子宮体がんは、女性ホルモンの刺激が長期間つづくことや遺伝的な要因でおこり、そのほとんどが子宮内膜から発生します。患者数は40歳代後半から増加し、50~60歳代で最も多くなっています。

